

毎日歌壇

水原 紫苑 選

飛ぶことは本当は怖い地面には震へて彷徨へる蝶の影
甲府市 村田 一広

△評▽こんなチョウの声をいつか聴いたような気がする。いちばん軽やかで実はいちばん怖がっているらしいチョウたち。

十戒が灼けつくようなグレンデの雪のひかりの激しさだけは
平塚市 芝澤 樹

△評▽雪の激しさは人間世界のものではない。天使さえも恐れるような光よ。

ペン先が折れても折れてもやめられぬこれは素敵な強迫観念
横浜市 砂月 七

この愛は表面張力なのだろう 指が触れても溢れなかった
盛岡市 立花 塵

いつの日か死につばなしの夜が来る水明かりよりほのと反射し
東京 池崎富実夫

きみの弾く剣き身のヴァイオリンがいい背後にうみの静けさを置く
東京 藤沢 静二

人になる人にならない人になる日がな花びらちぎる猿たち
福津市 原田 冬

園庭を無政府的に駆けめぐる園児をまねた綿雪の舞い
札幌市 橘 晃弘

抱かれればきずおふものをふかくふかくしづまむ薔薇の棘をこいたり
武蔵野市 八田 絵砂

ノタシオン ブーレース氏の楽譜から溢れる花の名はノタシオン
雲南市 熱田 俊月

伊藤 一彦 選

春だけが知ってる冬の別れ際知るはずのない夏、秋、私
川崎市 水 面

△評▽冬の別れを知っているのは春だけと歌う。結句で「夏、秋」に続けて「私」を据えたところに一首の主題が鮮やかだ。

ていねいにあくをとりのぞいたけれどそこにしずんでみえないせい
松原市 たりりずむ

△評▽現代の世界で「せいぎ」が見えにくくなっていることを巧みな比喩で歌う。

遠くない未来の地球をみるように色彩なきガザの街が広がる
前橋市 内山 征洋

かなしみに色があるなら雪のいろ涙ににじむティッシュのような
春日井市 月夜の雨

深更の白き家電のしびねは宇宙へと吾いざなふらしも
堺市 門哉 慧遙

ポッティチェリの若き女の肖像が見つめる先に広がる永遠
清瀬市 桃瀬菜美子

運命は書かれていないはずだと遺伝という設計図には
倉敷市 中路 修平

照らされた水面のような無垢な目で娘はどんな世界見るのか
福島 阿部はづき

墓までの治道に咲くしだれ梅お参り終えて気付く一本
周南市 浅田 純子

大地から雪の記憶を吸い取って花弁をひろく馬鈴薯の花
東大阪市 タカエレイコ

米川千嘉子 選

砂漠にて水汲む子など浮かびて消ゆペットボトルを箱から抜けば
東京 浅倉 修

△評▽重いペットボトルの水も通販で手軽にまとめ買いできる日本との落差。心が痛むような瞬間を下句がよく伝える。

来春も飾れるだろうか誰も来ぬままの「雛納め」心してまたね
春日市 林田 久子

△評▽ひな飾りは自分を大切にしている気持ちとどこか通じているのかも。結句が魅力的。

悲しむな「謹呈」 押む美麗本読みたい人のそばへ来たのだ
宮津市 野 ばら

ただ一度愛されし人の面影は本の間のしおりのように
柏市 宮本 正子

故郷の自慢あふるる段ボール大根レタス母のエッセイ
始良市 井之川健児

「楽しかったこと話しましょう」お互いを見回し黙す母のデイの日
伊丹市 岡本 信子

シルバーの託児の仕事に将来はイケメンと思う二歳児あやす
周南市 椋木 幸子

月見れば此の世彼の世は続きたり十年を経ても会へぬ君なり
高松市 島田 章平

返る言葉手に取るように分かるから先回りして黙り込む我
さいたま市 才野 明美

マンションは二百四十世帯あり友だ一人ありがたきかな
大阪市 岡田マチ子

加藤 治郎 選

名前などないと思っていた猫がやさしい声に呼ばれて消えた
長岡市 三月 とあ

△評▽野良猫だろうか。やさしい声で誰かに呼ばれた。名前があるいは「こっちよ」という声かもしれない。謎を感じる歌だ。

鯉、烏賊、堅魚、栗、梨子、木簡のきつと素敵なイベントだろう
東京 稲山 博司

△評▽木簡に様々な食材が記されていたのだ。古代の宴会に思いをはせたのである。

病床のホットミルクの湯気ふかくこの世はどこから夢なのだろう
東京 境 千尋

めくるたび未来が見えるカレンダー予定はないが明日が楽しみ
町田市 岡 良

いまにいまが満ちるのだろう夕暮の薄暗がりの痕をしのいで
平塚市 芝澤 樹

炎天におもたい光がこもって明日のいまごろ髪を切る
横浜市 大原 香花

記憶から無数の腕が伸びてきて再会したいあなただやあな
鳥取市 中之島 潤

牛乳のパックに付いた脇差の如きストロー下方から抜く
広島市 堀 眞希

絵の中の馬がこっちを見てるけど私はどこにいますしょうか
岡山市 松井 度

銭湯でコーヒー牛乳分け合って君と未来の話をして
清瀬市 貫地谷桃香

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要)毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選者名)係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(<https://mainichi.jp/kadan-haidan/>)でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。



こちらから投稿できます